

第32回日本骨折治療学会印象記

北海道社会事業協会帯広病院 高 畑 智 嗣

【会場】東北労災病院の佐藤克巳先生が会長。06年7月14～15日（金～土曜）に仙台国際センターで開催された。会場は仙台駅からは少し遠かった。しかし、ワンフロアに中規模以上の4会場がとれ、残る2つの小規模会場も同じ建物の1階違いだったので、会場間の移動が容易だった。近年まれに見る良い会場だった。

【演題】演題は応募総数410題が366題に絞られ、そのうち89題が展示発表であった。以前のように応募すれば必ず口演発表ということは無くなった。発表時間は主題が口演6分+質問4分、一般が口演5分+質問3分と長めに取られていて良かった。

【会員数】会期中に会員数は約2970人になった。これは整形外科関係の学会では屈指の数だそうである。そのうち100人以上は今回の学会場で入会した。

今年から日本骨折治療学会に入会するには会員の推薦が必要になったが、これは医師以外の入会・発表を防ぐためにはやむを得ない手続きです。しかし心配不要です。未入会の人でも、まず会場に来て下さい。本会には毎年、北海道から何人も参加していますので、会場で見慣れた顔に声をかければ必ず推薦してくれますので、現地で入会出来ます。

【テーマ】テーマ(1)は「骨癒合を考える」。利用可能な骨癒合促進法がシンポジウム場で討議された。それらは体外衝撃波、低出力超音波パルス（LIPUS）、電気刺激、線維芽細胞増殖因子（FGF）などである。

テーマ(2)は「卒後外傷教育」。若手医師への外傷に関する教育をどうすれば良いか、経験の深い演者が討議した。演者は大学の教育関係者、AO法セミナーに携わるAOグループス

タッフ、独自にセミナーを開催しているJABOの世話人（私も関係者です）などであった。過去6年間に骨折治療学会で発表の無い国公立大学が19校、私立大学が4校あったと示され、興味深かった。

【その他の話題】

「上腕骨近位端骨折」近年改良が進むlocking screwが沢山入る髓内釘と、AOグループが提唱しているlocking compression plate（以下LCP）が興味の的。両者が対決したディベートが大変盛り上がり、良い企画だった。一方で、保存療法やK-wireを用いた手術で、たとえ変形治癒となっても最終的には臨床成績は悪くなかったとの発表もあった。

「大腿骨転子部骨折」頸部骨折と転子部骨折の境界型とも言える頸基部骨折（少なくとも骨折線の一部が関節包外）の取り扱いが話題になった。この概念を知らずに無造作に手術すると失敗する。転子部骨折に関しては髓内釘型の発表が大部分であったが、実際の使用数ではまだCHS型の方が多いのだそうだ。しかし、髓内釘型の新製品が続々発売されており、例によってその商品名を演題名に戴く臨床発表が多数あった。

「大腿骨頸部骨折」ハンソンピンが市民権を得たように感じた。人工骨頭では小皮切法（MIS）を取り入れる試みが散見された。

「脊椎骨折」脊椎関連の発表が結構多かった。高齢者の圧迫骨折や粉碎骨折に対し、ハイドロキシアパタイトやバイオベックスの充填術が多数発表された。

「骨盤骨折」救急部をもつ大病院や大学病院の発表が大部分で、麻酔科や放射線科や泌尿器科なども含めた集学的治療を実践している。

市中病院の一般整形外科医にはちょっと入りづらい雰囲気。

「DVT や肺塞栓」 スクリーニングのための検査法や境界値を模索中。

「橈骨遠位端骨折」 掌側ロッキングプレートに興味が集まり、発表演題も新製品も多い。数年前に隆盛だった non-bridge 創外固定を凌駕している。やがて数年したら、次の新技術に取って代わられるのだろうか。

「MIPO 法の適応拡大の試み」 例えば橈骨遠位端骨折の掌側プレートを MIPO 法で

行った報告では、発表者自身が適応は限られると発言。脛骨遠位 plafond 骨折を MIPO 法で行った報告では、質問に対して MIPO 法を試みたが断念して ORIF に切り替えた症例も多かったと回答。一般の整形外科医は、もう少し様子を見た方が良いでしょう。

【次会予定】昭和大学の宮岡英世教授が会長で、07年6月29～30日（金～土曜）に東京、京王プラザホテル（？）で開催されます。北海道の皆さんの多数の参加を期待します。